

グレートジャーニー完結

ユーラシア大陸は平らだった

河合塾 全国 5 か所の記念講演を終えて

関野吉晴さんを囲んで聞く

聞き手 牧野剛

相京範昭

2002/12

相京： 今日に関野さんが河合塾で5回ほどやった講演の感想を聞きたいのです、よろしくお願ひします。立川校での話が最初だったわけですが、今回の旅が奇跡的にうまくいった、これは世界の情勢、条件、平和という問題もあるしということをお話しされていた。一番衝撃的だったのは「ユーラシア大陸は平らだった」という、下りだとか平らとか割け目があるとかは実際に歩いてきた人でないと絶対見えてこない事だと思うんです。これは逆に辿って来たわけですが、モンゴロイドが行った場合というのは楽に行ったのか、風向きなんかもありますよね。そういう感覚みたいなものを聞きたいと思うんです。それが大きなテーマです。

平和の話もされました。それから日本人であること、広島・長崎の話もされました。イスラムの人の優しさ、そういう話はその「時」だから話されたのか、あるいはイスラムという宗教性みたいなものというにはどこかに、それまでは南米あるいはアメリカ両大陸とは違うのか、そういう宗教性みたいなものが特にユーラシアに来たらあったと思うんです。

質問の中ででてきたのが、医療行為をされる、医者としての関野さんの話。

それと老いについて、これはこれからの時代の中で非常に重要な話だと思うんですけれど、「老い」についての質問の中で「あなたは必要なんだ」という、これはシベリアの話の中で出てきたんですけれども、必要だということのよって生甲斐もでてくるという話も出てきたと思います。

講演をやって思うことみたいなものはありますか。

関野： 思うことは、やっぱり人に説明することがいちばんの勉強だというか、話してこん

なこと言ったけど、本当は違うのかなとか後から思ったりするわけです。そうすると何か頭を整理するのに人に話をするというのがすごく、それも同じ年代とか職業とか、同じ人ばかりやっていたら、結局おんなじことばかりになってしまうのだけど、いろんな社会人、おじいちゃんおばあちゃんだったり小学生に話したりしていると、いろんな人に話すとそれぞれによって違う話し方をするので、するとテーマも変わってくる、いろんな人とやったんで一通りやってみて、――やっぱり整理できないんですけれど。

相京： でもそれはいろんな人に世界を歩いて来られたわけですよね。それに違和感みたいなものはありますか。

日本人に、この列島の中でお話をしてくて、通じる事と通じないことみたいな。

関野： それはたくさんありますよね。例えば僕はよく言うのは、文化の違いの話ですけど、何で文化が違うのか人間だけ、類人猿でもタヌキでも文化に近いものはあるけれど、場所によって明らかに食べる物が違う、着る物が違う、そういうハッキリした文化を持っているのは人間だけだと思うんだけど、芋を洗うとか蟻をつるとか、そういうプレ文化とかそういうものはあったとしても、文化がなきゃ生きていけない動物っていうのは人間だけだと思う。何故文化ができたかっていったら、文化があれば文化があった方が生き易いから、むしろ文化がなかったら人間は生きていけなかったと思う。なおかつやっぱり人間の他の動物と違うところはこれだけ世界中に広がった。猿はせいぜい北緯42° 下北までしか行けなかったのに、極北まで進出したからアラスカ新大陸まで行けたんだし、なおかつ航海術も身につけてオーストラリア・オセアニア、もう地球上の陸地のほとんど隈なく住めるようになって、それは何故かっていったら何でも食う、適応する衣服・住居、要するに文化というものを創ったから住めるわけで、そのままでは住めなかった、これほどの広がりはない。だから世界中食べ物が違うのは当たり前で、そこにいちばん適した食べ物、美味しさの面でもいいし、栄養の面でもいろんな面で、そこにしか、そこにあるもので生きていかなきゃいけない訳だから、そうすると地域で食べ物がいちばん限定される。いろんな所でいろんな物を食べているのは当たり前なわけで、それで食べ物によって、あるいは文化によって、優れているとか優れていないとかいうのは、それはバカなことであって、ということ言ってる説明してその後に、何だあんなもん、関野さんあんな物食べたんですか、とかね。(笑い) 要するに昆虫の幼虫を食べる人は下等な人とか野蛮な人という意識があって、そういうふうに説明しているのにその直後に関野さんもあんな物食ったんですかとか言われると、俺の話聞いてよ。(笑い)

そういう僕のやっぱり伝えたいのは、文化というのは相対的なもので文化に上等なものとか下等なものとかはないということ言いたいたいだけけれども、なかなか伝わらない。

今回の旅は本当にあらゆるところ、あらゆる生活環境のところを通ったわけで、そうすると南米でなくとも分かることの方が結局多かったのだけれど、南米でなければ分からなかつ

たことっていうのは、やっぱりそういうことなんですね。

砂漠でも極北のマイナス40°を越すような所でも、サバンナでもあらゆる所に人間は住むようになって、それに応じて文化を創った。それはいいとか悪いとかは別として、それは人間の特徴である。だからそれによって人を区別する、区別するのは別にいいんだけど差別する。でそれは国際化ということにかなり結びついてくるのだけれど、国際化というのは、みんななあ、仲良くしようよということではないと思うんです。基本的に嫌な、生理的に嫌な奴と付き合わなきゃいけないということだから、これだけスピードアップした世界でどんどんいろんな人と接触しなきゃ生きていけない社会になると、食べ物に関して言うと、ニンニク臭い連中とも付き合わなきゃいけないわけで、それは生理的に嫌なわけです。逆に言うと漬物臭いやつとは付き合いたくないって向こうは思っているかも知れないし。だからヨーロッパに行けば、魚の生なんて食ってる奴とは付き合いたくない、あるいはタコやイカナ・マコなんか食ってる奴とは付き合いたくないって思ってる。それは生理的な部分というのはどうしようもない。これは勿論文化によって変わるものなんだけれど、たとえば豚なんか、イスラムの人は知らないで食べてあれは豚だったよとこれを吐いちゃうというのは、結局文化と制度とかなり結びついたものなんだけれど、でもこれはどうしようもないもので、ニンニクの臭いの嫌いな人にとっては耐えられないものなんだからニンニクばかり食っている奴はやっぱり嫌な奴だ、「くさや」ばかり食っている奴は向こうにとっては嫌な奴だ、そういう生理的な面で、これは論理ではどうしようもない。そういうのを分かった上で仲良くしようよっていうのでないと、みんな同じ人間だから仲良くしようよっていうのでは最初からすぐに挫折するって。(笑い)

相京： みんな同じ物を食べるというね。

関野： それが言っているのだけれど伝わってないのかなって、後から質問やなんかを聞いていると。

牧野： むつかしいんだな、それが一番むつかしいですね。

そうすると、もうひとつ質問があるのは、関野さんは南米からはみ出した時に、逆に南米では見えなかったものが幾つか見えてきたと思うんだけど、そこからひっくり返って今度は南米を見直したら、さあ南米はどういう所なんだろうというのが、もう一回でてくるんでしょうね。

モンゴロイド的に繋がっていると見るべきなのか。

関野： モンゴロイドとかコーカソイドとかネグロイドとかそういう枠は、僕は関係ないですね。

牧野： 関係ない。

関野： というのは、エチオピアの南部の人たちは全く同じですね、アマゾンと。そういう意味ではアラスカのコーカソイドの人でブルック山脈の人なんかはコーカソイドですけども、全く生活態度あるいは思考パターンなんかは全くアマゾンの人と変らない、そういう意味では人種別ではない。

牧野： さっきの文化に戻るわけだけでも、それぞれの地域で典型的には食べ物に象徴されるような文化という点からひっくり返ってみた時に、南米あるいは中米というのは、人種的な区別やなんかではない何か決定的なものがあるのかなのか、ということなんだけれど。それが、最初相京が言った、例えば風土みたいなものとか、見える景色とか、たぶん写真集なんかを見ても南米の月か、とても地球上じゃないような大地とかいうものと、アジアの山脈の連続とか砂漠とか、あるいはシベリアの大地みたいなものというのは、多分住む動物をある意味では限定したり、故にそれを食わなきゃいけない人を限定したりしたのかどうかというような。

関野： ただ南米の風土とか特に景観に関係していうと、「南米がいちばん多様性がある」ということですね。僕が南米に20年間通ったというのは彼女がいたわけではなくてやっぱり多様性ですね、ひとつは自然の多様性、ひとつは文化の多様性で、自然に関していうと結局世界中にある景観の全部が大体揃っているんですね。そうすると南米を初めて出て一っ上から、ユーラシアに入ってアフリカに行って、とほとんどの場合、あ、南米のどこかで見たことがある光景だというのが繰返しだし、文化的にいうとやはりいちばん多様性があるというか、北米と比べても、北米の場合はやっぱり住むために女の人も連れてきたから、混血もほとんどしてない。それに対して、南米の場合はほんとに先住民とスペイン・ポルトガル人、それから労働者として連れてきたアフリカ人と、色んな混血をしているわけですね。その混血の度合に応じて新しい文化を創っていくということで、それは文化的にも非常に、ちょっと場所を移っただけで違うかなと。そういう意味で多様性に関してはすごいのと、アフリカなんかと比べて、都市に近い部分に関しては、スペインとか一部イタリア・ポルトガルの影響が強いんだけど、政治的には宗主国の影響は受けていない。アフリカなんかは完全にそのままだけれど。民族によって国境を決めているわけではないから、そういう意味で国境紛争を戦っているエクアドルあるんだけど、すべて民族紛争ではないんですね。ただ単に俺たちの領土だという、線引きの問題で、民族はそれぞれ、いや構成は違うんだけど、新しい文化を創ろうとか、そういうことは起らない。それが他の地域とは全然違う。

牧野： もし、その風土が南米の多様性の中で、いわばその他の地域やどこかで見たことが

あるという風であるのか、例えば食べ物とか生活様式もやはり南米でみたものが、アジアにとか、そういうのとは違うんですか。

関野： あっ、それは食べ物に関しては、これほど地球で違うのかというくらい決定的に違いますね。ただやっぱり動いていますからね。たとえばアンデス原産のジャガイモがこれだけ世界中で使われているとか、もともとなかった東南アジア原産のバナナがいろんな所で主食になって、あるいは主食に近い状態になっている。そういう意味で重要なものは伝播してくるのですけれど、ただ全部そのままそっくり移動するかというと良い所取りしてて、それは良いことだと思うんですけど。

やっぱり風土というか、大体北部以外は先住民社会ですね。先住民というのはやっぱりいわゆる辺境というか、支配者にとっては住みにくい所に押し遣られている。といういろいろな意味で共通してくる。その共通性はまず効率を優先させない。それから競争を好まない。競争を好まないっていうのは、競争は好きなんですよ、シベリアの遊牧民とかモンゴルの遊牧民の力比べとか、ダンベルみたいなのを何回持ち上げられるとか、レスリングも好きだし、トナカイレース、犬レース好きなんだけれど、そういうことによって競争して勝ったからといってその人全体の評価にはならない。それは別。だから、競争に力強いからってリーダーになれる訳ではないし、良い物を食べさせてもらえる訳ではない、特権はないわけですよ。それから少なくとも足を引っ張るような競争はしない。

それから時間の流れですね。牧野さんよく車のことを言われるんですけど、よく質問されることに、アマゾンの中に何ヶ月もいて、帰ってきて、東京に住んでいて違和感ないですか、すぐスウー溶け込めるんですかって言われるんですけど、最近溶け込めちゃってるんですよ。すぐスウーっと。その理由がだんだん解ってきた。僕最初に行った年ははじめなかった。ほとんど半年間使い物にならなかった。大学の寮でほとんどベッドから動かないで本を読んだりして、ダラダラダラダラと生活していたんだけど、結局だんだんもう合わせたくないっていうか、もともと団塊の世代だから、高校まではとにかく競争々々で競争することがいけない事なんて思わないし、競争には勝たなきゃいけないって、むしろ思っていたし、外国から材木を持ってきてくれる人、山を砕いて鉱物資源を持ってきてくれる人、油を持ってきてくれる人はやっぱり素晴らしい人、僕たちのために働いてるんだと、そういう風に慣れてというか、そういう感じだったのが大学に入ってそれがどんどん変わってきたんだけど、それが決定的に、アマゾンに行ったら結局そこで一番ひどい目に逢っているのは友達になった先住民の人たちであったり、ちょうど30何年前に行った時はアンデス石油はいろんな日本の企業が金を出し合っぺるでペルーで油田を探そう、アラブに頼っちゃいけないっていうんで、ペルーにも油田を探そうって行ってその探査が始まったんだけど、そのやり方が10キロおきに1mくらいのカッティング、道を作っていくわけですよ。それが縦だけじゃなくて、碁盤の目のようにしていくわけですよ。それはすごい森林破壊なんだけれど、森林破壊だけではなくて、動物たちも生態系の破壊なんです。でその時に友達になった人た

ちが、たとえば労働者として石油会社の人に雇われるかっていうと、こいつらナマケ者だからだめだって、役に立たないからって山から労働者を連れてこられるわけ。だからその友達になった人たちに何のメリットもなく、破壊されるだけだっていう。それがすべてにわたる。そうするとやっぱりこれは何もしない方が一番良いのかっていう想いでいたけれど、やっぱり後ろめたさはある。僕は東京の下町だから、千葉県から70過ぎたおばあちゃんでも、行李のでっかいの背負って、野菜とか花とか持って来るのを、べつに日常の光景として見ていたんですよ。でも帰ってきて、僕は大学の国立の寮でゴロンゴロンしていて、実家に帰ってそういう人たちを見ると今度は光って見える、というかね。

僕は小学校の時は一番えらい人は総理大臣で一番大切な人は天皇陛下だっていって、小学校の初めの頃はそうなのかなって思っていたけど、中学に入った頃にはそんなことはねえだろうって思ったけれど、担ぎ屋のおばあちゃんが輝いて見えたのは、普通物をコツコツ作ったり、物をコツコツ売ったりする人が一番偉いんだってという想いを徹底的に強くして、で光って見えたんだと思うですけど。

本当に半年から一年くらいもう使い物にならない。このままダラダラ行こうかなって。だけどそういうダラダラしてられるのは、学生の特権というかね、大学生という身分を長々とやっているから出来るんで、バイトをちょっとやってということ出来るんで、あんなおばあちゃんみたいに一生懸命働いて生きるだけでも大変な人もいるのにとこのそういう面もあるし、なんかこう頭の中がゴチャゴチャしちゃって、なかなか社会復帰できなかったんだけど、そのうちに、次のもう一回アマゾンに行ってみようって計画が出て、また元に戻ってきたんですけど。

やっぱりいろんな世界中歩いている人間をみていると、二つのパターンがあるというか、一つは帰ってきて、開発途上国に長く行って帰ってきた人の中で、一方ではやっぱり日本が一番すごい、あいつらはナマケ者なんだという人と、自分達が物質的に豊かな生活をしている陰では、やっぱり困っているというか、そのお陰で、被害者というか、そういう人もいると思う人と、分かれると思うんですよ。で、どういう人と付き合うかとか、その付き合い方にもよると思うんですよ。

むしろ僕は後者の方になってしまっただけで、ちょっとそんなスウーッと入れなかったのだけれど、2回目からはスッと入ったんですよ。それからずうっと。

その理由というのがスピードと関係があるというか、僕のずうっと接触してきた人は、時速5キロのスピードで生きているんです。ようするにから歩きですから、アンデスもアマゾンも。そうすると東京の人間は大体80キロ、どんなに俺は運動不足って言っても、結局車とか電車やバスに乗るんで、大体80キロの生活をしているわけです。じゃ開発途上国の人たちは全部5キロの生活かというところではなくて、例えばペルーでいうと僕はクスコというインカ帝国の首都を經由して来るんで、クスコになんて出て来ちゃえば時速80キロといわなくても40～50キロの世界、今行けばもう70～80キロの世界で、クッションおいて来るんですけど、決定的に5キロの世界とは違うわけですよ。5キロの世界という

と、クスコの50キロくらいの世界というのは、むしろ東京に近いですよ。多分一回目の時は5キロのまま僕は日本にしようと思った、っていうことはどういうことかということ、東京から大阪に行くのに時速5キロしか走れない、最高速度5キロの車で走ろうとしたら、どやされるしぶつけられるし、大変な思いをしなきゃいけない。ようするに流れに棹さすわけで、大変なんだけれど、それを1回目ではやったんだけど、2回目からは80キロで周りが走っていたら、80キロの方が楽だから、帰った時は80キロ、向こうに行ったら5キロの生活をするという、僕、適応力は優れていると思っていて、それはどこに行っても何でも食える、何処でも眠れるっていう能力ですね。それをだから2回目からは逆の適応力も発揮できたというか、こっち来たら80キロにみんな周りしているんだから、80キロ出せばいいじゃないか。でもそれが出来ない人は結構多いですね。5キロとはいわなくても、80キロの中で20キロ、30キロで生活をする。それはやっぱり、良いか悪いかということになると、社会を変えていくためには、周りが80キロだから、80キロよりもいや俺は頑張って30キロでぶつけられて怒鳴られている方が社会を変えていくという、それは全部に言えて、例えば携帯、無いと今公衆電話探すの大変で、やっぱり周りの状況によって全部変わってくる。メールがないとこう何かみんなと連絡とれなくなるとか、その中で使わないでいるとか。だから5キロのところで5キロで居るというのは全然困らないわけですよ。でもここで5キロやったら困る。で携帯なんかなくたってアンデスでは全然困らない、でもここでは困る。パソコンもなくても、別に皆使っていないから困らない。そういう意味で、僕がすんなり入ってきたのは、最近、1回目うまく行かなかったやつが2回目以降はスウーッと入ってきちゃっているのは、もうしょうがないや、便利な物は便利に使おうっていうかね、そういう風になっちゃてる。それが良いのかどうかはまた考え直してって。(笑い)

相京： 多分その辺は進歩というか、あるいは21世紀というかこれからのことに関わってくると思うんですが、もう一回ちょっとしつこく風土みたいなものに。ようするに逆に来られたわけですよ、つまり西風みたいなものとか、楽な方に楽な方にモンゴロイドは行ったんですかね。あの辺の感覚というのをもう一度。つまり風もそうだろうし、あとは・・・。

関野： いや、楽な方に楽な方にとは僕は考えてなかったと思うんですね。たまたまそうなったという。というのは要するに、お城には人が住んでいるわけですから、自分のいる土地が一番安定していただけるというか、安心していただけると思うけれども、向こうへ行ったらもっといい生活が、美味しいものが食えるかもしれないとか、住み易いかも知れないとか、誰も住んでない。そしたら若者が行って見て、おお良い所だよ。あるいは獲物を追っていて自然に行ってしまったとかね。多分風向きとか、ようするにスピードが結局新大陸を渡ってカナダのところの海洋ができてから南米の最南端まで1000年、1000年は速いって言っているんですよ。一世代20年とすると五十世代なんですよ、1000年で。そうする

と400キロでいいんですよ、一世代。だから別に風向きとかね、風が吹いている時は住まなきゃいいんだし、そういう意味で言うと、地形的な面とかあんまり関係ないんじゃないかな。実際僕が8年とかいうペースで行こうとすると、あ、戻るのは大変だなということはあっても、初期人類の人たちが移動した時はあんまり関係しなかったのじゃないかなと。たしかに彼らは来たら戻らなかったと思うんですね。それは戻らなかったのは、後ろにどんどん人が押しかけているところよりも、新しい所へ行った方がいいからだと思う。あとは後ろからどんどん来て突き動かされたっていうのは最後のパタゴニアの人たちはそうです。そういう意味であまり地形を考えて、行き易いからからっていうのは、400キロだから、別にルートは沢山あるわけだから、行きにくければ、いいやこっち行こうかなって。

牧野： それに最初に北に上がって、たとえばシベリアの方に上って行くこと自体が、何回も言われているように、こういうものでもなければ、非常にではないかもしれない可能性もあるし、非常に厳しいわけだから、その点では南下していく時はまだ安心ですね、暖くなるわけだから。北の方に行く必然は要するに、まさかベーリング海があるってそっちに行ったわけではないだろうから、この前の本の最後にも書いてあったように、若い衆たちがやっぱし例えば家族が増えてきたら、みんなない所へ行って二人だけで過そうとか、面白いことあるんじゃないかとか、こういう何か好奇心みたいななかつたら行かなかったろうね。俺達だってガキの時に、何か探検みたいなことをしょっちゅうやっていたけれど、そうすると皆が行かん所へちょっと行って見よう、学校なんかで危険だから行くなと言われている所へ、やはりこういうふうに行こうとか、洞穴発見とか、本当は元からやっぱり人間の本质としてあることはあるんだよね。

関野： 多分それが、600万年の歴史の中で猿人とか原人とかネアンデルタール人とかはそんなにアグレッシブではなかった。我々直接の先祖のホモサピエンス、サピエンスとかようするに新人類ですね、やっぱり特殊、人類の中でも特殊で、すごくアグレッシブだったんだと思うんですね。だからこう、ネアンデルタール人の関係はわからないけれど、多分滅ぼしちゃったんだろう。それでなおかつ、結局、極北に進出したのも、海に進出したのも、新人になってから。

牧野： 多分そうなんだろうね。もっと言えば進出することによって新人になったかもしれない。だから人数の問題もきつと、新人になって時に爆発的にきつと拡大して、それ以前は、特に食糧がいっぱいある赤道周辺にいた時は、そんなにアグレッシブになる必然性もなかったよね。そこで安気に暮しておればよかったのに、多分何かの理由は、まあその後だったら、間氷期とか氷河期とか、気候的問題であるとか、人口爆発みたいなものが小さいながらも起こって、そうするとやはり好奇心のある若いやつを中心に、俺みたいな跳ね分子みたいなのが登場して来て、俺は絶対あそこに行って来るみたいな事で行くことになっ

やうってのが、あるんだろうね。

さっき風土みたいなことを言っていたんですけど、至っておおまかになんですけれど、これもきっとまたさきほどの出題と同じになってしまうかも知れないんですけど、匂いとか風の味みたいなものというか、そういうものは、南米とシベリアとか、あるいは中東とか何かやはり決定的に違うものですか、あるいはそれは違うんですか。

関野： 違います。空港降りた時に、例えばリマだともう鮮明に、来週リマに行くけど、もうこういう匂いがするというのがありますね。その場所場所によって違う、やっぱりシベリアはシベリアのにおいがする。何かこう、言葉では表現できないですが。温度との関係もあるんですね。

牧野： 絶対そうだねえ。いや何でそんなことを僕が考えるかという、僕は岐阜県の山の中に住んでいると、東京はもちろん人がこんなに住んでいて排気ガスがあるからというだけじゃなく、やはり全然違うものを感じますね。空の感じとか空気の味みたいなもの。それは九州に行って福岡以外の、例えば山の中に行って高度が同じ位なのに、やはり違うんですよ。これは自然のあり方みたいなものに非常に深い関係があるような気もするし、何かそれがある種動物とか植物の違いを作り、食べ物の違いを作っているのかなあと思うし、逆に言うと食べ物がそう違うから、こういう風になっているんだという、そういう匂いになっているんだという感じもするんだけど。何かやはり世界で、僕はこの頃はカンボジアとか中国とか行くことが多いけれど、その時もやはり違うという感じがするんだよねえ。シベリアはどんな匂いなんですか。

関野： シベリアもこう、夏と冬では全然違う。

牧野： 違うでしょうねえ。夏はもうヌルっとするこう、ドブみたいなものですか。

関野： 冬は乾いたこうスコーンと抜けた感じがする。

牧野： やっぱりそうなんでしょうね。

相京： う～ん。

牧野： やっぱりそうなんです。それは例えばカナダとかアラスカと。

関野： アラスカはそれ感じないですね。アラスカはねえもうちょっと二季的な感じがする。

相京：そこは例えば二季的っておっしゃったけれども、木もあるし形態としてはかなり似ているわけですね、風景というか、でも何が違うんですかね。

関野：それはやっぱり大都会があるからアンカレスとか、道路がバーンと。

相京：あやしきじゃないけれど、何かいるという気配みたいなものがあまりないという・・・。

関野：いや、というか、もう人間の力が入っていて、それでもうちよっと戻ればアメリカ本国と通じているような感じがある。それは生理的な匂いではない。やっぱり頭の中で考えることなんだろうね。

牧野：シベリアは結局、未開だということなんですかね。

関野：ワイルドですね。

牧野：やっぱりワイルドですか。そうしたらそれに比べたら中東とかアフリカなんかの植民地主義者によって徹底的にいろんな工作をされた感じのするワイルドとは全然違うのですかね。

関野：そうですね。でもエチオピアの南部とか場所によってはまだ、アフリカでも。中東はちょっとないですね。

相京：最初ちょっと言いましたけれども、印象的だったのはユーラシア来たら平らだったということってというのは、その前のアメリカ南米のアメリカを通して来られてですね。

関野：うんやっぱり違うのはシルクロード走った時に、もちろん起伏はあるんだけど、アンデスと比べたら比じゃない。自転車で世界旅行するっていう若者がけっこういるんだけど、南米から始めた人は止めたっていう人が多い。起伏があつて辛いんですね。やっぱりシルクロードは平らでそれで馬とラクダがいて、車輪があつてつてなったら、それにローマと日本の間いっぱい行き来しているし、色んな王朝とかがコウゴウするっていうのがよくわかる。

相京：ひとつの帝国ができちゃうなんていうのは非常に分かりやすいという。

関野：まあそうですね。

相京： そうすると、大きく分けるとアメリカ大陸っていうのと、アフリカがあって、その間がひとつみたいなことなんですかね。アフリカはどんな印象ですか、そういうこういう一つの話として、起伏と平らいうことでいうとアフリカっていうのはどんな。

関野： アフリカもけっこう平らですね、平らという意味では。でもずいぶん砂漠があるから。風土とかそういう面で全く関係なく、なんか面倒臭い国境をつけたなという感じですね、アフリカの場合はね。中南米は国境全然うるさくないんです。国境でいざこざがあったのは自分が悪いからいざこざがあったことがあるんだけど、渡る時のトラブルってないんですね。

アフリカは、それはもう、エジプトからはじまってなんて面倒臭いというか。

牧野： あれは地図の上でヨーロッパがただ単に引いた線でしかないんで、人工的過ぎるよね。けど南米とかなんとかだったら、アンデスでこう国が割れていて、当然それはそう簡単に越して行けるというイメージではないから、もちろん先住民の人たちは平気でそこは行けるとしても、多くの都会人は、それは越えられないよね。

関野： アフリカの場合はそんなに広く行ってないから、北東部しか行ってないんで、アフリカ全般をいうことは出来ないと思うんだけど、やっぱり面白い。特にエチオピアは最高。

相京： 話の中でシベリアの森の精じゃないけれども、その話とエチオピアの原始キリスト教みたいな話、かなり講演の中でもあったと思うんですが・・・。

関野： エチオピアの特徴は貧しさとももちろん関係あるんだけど、さっきのアマゾンとかアンデスの5キロの世界と言ったけれど、エチオピア人は街、道路にいっぱい凝縮して住んでいるんですよ。だから自転車で走っているとみんな群がってきて、一緒に走るやつが出てきたり、おもしろいんだけど、結局車が走っていても、道路があっても、乗っている人はそんな多くない、要するに道路際に住んでいて車に乗るってことないですから。だらか道路が発達して道路に住んでいても、5キロの世界を維持している、それは他の世界ではあんまりない。面倒臭いからみんな、でもエチオピアはお金ないから乗れない。まあやはりスピードと行動パターンとか物の考え方とはすごくこう影響しあっているような気がするんです。

相京： それは例えば切り替え、関野さんが最初におっしゃったけれども、東京に来たら溶け込めるといような言い方のなかで、そういうこと言えばエチオピアの人たちはどういう切り替えをするのか。

関野： エチオピアの人は切り替えってないです。だから自分たちは5キロの世界、自動車

が走っても関係ない。

相京：　そこで自分が80キロの世界に入らない、ひとつのこう、彼らは何かあるから入らないっていうのか。今の話では金がないっていうのもあるんだけど、それ以外にも何かあるんですかね。

牧野：　ようするにそれは金がないっていう・・・。

関野：　だから車で走ってて、巡礼者たちに会うとやっぱり乗ってくれっていう、やっぱり楽はしたいから。でも金稼いでまでは乗りたくねえよって。

相京：　ひとつ実は、講演の中でテープが途中で切れてしまっている所があって、中国の印象の中で、中国は宗教で繋がっているというような言い方をされてたんですよ？。

関野：　いや宗教でつまずくだろう。

相京：　つまずく？

関野：　ええ。

関野：　だからその対極にあるのがイスラム社会。そのまま行ったらつまずきが地球的規模にも通じる、中国の場合はね。

相京：　それは規範だとか倫理だとか、何かこうけじめのなさみたいところとか、色んなことがあるんでしょうかね。

関野：　うんやっぱり神様がいないわけでしょう。でもいるんですよ。芥川龍之介がクエマラ教って言ったけれど、クエ、食べ物と、食とセックス、要するに似たようなものというか、ようするに物が神様、お金が神様に今なっちゃっているから。日本も一部そういうところあるけれど、それがもっと極端で、それがあの人口でワーツといたらどうなっちゃうんだらうかって。

僕は、もと社会主義国、ニカラグア・ロシア・モンゴルってやってきたけど、まだ何か社会主義を引き摺っているんですね。それで今度初めて本当の社会主義の国に入るって、入ったら、何だこれかって愕然としたんですね。

相京：　中国なんかは最初から行っても面白くないって思っていたんですか。

関野： いや特になかったですけども、重点がチベットとウイグルだったから。中国とインドは後でとっておいてゆっくりやればいいと。

牧野： 中国インドに入ってしまうときっと、脱けられなくなってしまう（笑い）。7年9年では間に合わなく、グジャグジャになり逆に辿るどころか違う旅になってしまう（笑い）、ある日ハッと気が付くとそこに家族を作るとか。（笑い）

相京： それはどこかであらう、日本人はどこから来たかっていうような所もちょっとあったんですか。中国に触らないようにしようとか、あるいはインドに触らないようにしようとか。

関野： インドってのは、僕は多分、最初本当はインドに行くべきだったのじゃあないかなと思ったのは、要するに、けど僕は高校時代の自分をなんとか変えたいというか、とにかく全く自然も文化も違った所に自分を放り込んでみたかった、あまり違わなかったというか、アマゾンも。インドに行ったらメチャメチャ変っていて、だからかなりもうちょっと、もっと大きなこう変化みたいな。

牧野： 完全にヒッピーになっちゃう。（笑い）

相京： でもあの時代ってビートルズじゃないけれど、かなりインドに行った連中はいますよね。

牧野： 完全に模様が変わってしまってもみんな奇妙なことになっちゃったし、みたいなものになっちゃったしねえ。

相京： 反発みたいなものもあったですか。

関野： 全然反発というか、インドの方がよかったかなって。（笑い）

牧野： アマゾンだからきっと、スピードや価値観は変化したとしても、全面変化じゃなく、さっき言われてたように行った時は好奇心で、行った時は5キロで、帰ってくれば始めはちょっと違和感あったけれども、すぐにやはりこちらという風にやれたのも、きっとアマゾンだったからだったよね。もしインドでそれになってしまった場合は、もうこっちきたら裸足につっかけゾウリ履いて、ペラペラペラっと歩くという風にみんななっちゃう所を見れば、多分なっちゃうんだよね。でもう車は乗らないみたいなことを言う人になっちゃうんだけど、そうじゃなかったからきっと、持ったといえれば持った。だから逆に言えば、そのことが

あるからまあ何時かは行くかも知れないけれど今回はいいやという風に、中国やインドは蹴ってしまったのかも知れないね。

関野： 中国はともかく、インドはこう重い感じがして生半可でちょっと寄るっていうわけにはいかないといった感じがするんで。

牧野： 昔、僕らもチェコとか行ったんですけど、そうしたらもうポーランドですごくおばあさんと、その人は社会主義政権の元で、隠れてキリスト教を信じて、それで何が社会主義政権がいけなかったっていうのは、潰れた時ってその人は言ったんだけど、結局は、たとえば馬車を引いているおじさんがいて、それを子供が押してやったとして、例えば10分もしたら10分の金をよこせというのが社会主義の最悪のものである、無償の愛というものがないというのが彼女の意見なんだよね。だからその時に日本なんかは、俺の子供なんか父さん肩叩いて10コ、トントントンはい200円ってこうやってやってるんだよって言ったら、エーッ自由社会もそうなるんだっていうね。(笑い)

でさっきの中国の話なんかで典型的なのはマルクス主義・社会主義っていうのは、ほぼこういう無償の愛の否定みたいなかつこの、時間・金みたいなね。こういう金が完全に物心化していくような世界がもの凄く強くあって。

だから宗教って言われたけれど、宗教的な、要するに阻害、つまり無償の愛みたいなやつ妨害がないから全面的に金になってしまう。まだ日本なんかはその田舎の年寄りとかなんかを始めとして、律儀になったりする。そこまで金って言う人はまだいるけれど、若いやつがダーッと流れたように、中国はもう上から下まで全部カネーっていったんじゃないかと思うんですよね。だから社会主義ってすごいなあっていうか。何ていうことなんだ、僕らは昔のイメージで社会主義っていうのは金の否定ではないかっていうふうに思ったんだけど、逆だったんですね。

その点では、中国は今回の旅からはやはり避けておいて正解であろうという気がするよね。違う話に入りこみそうな気がするよねえ。

相京： 平らというのも何か何処かでありますかねえ(笑い)。平らっていうのはようするに考え方の中で起伏、南米というのは起伏があるというか、それぞれの谷で違うし列島も多分違うと思うんですね。だからそれが非常に平らだと、まあそこまで風土に合わせちゃうとよくないんだけど一。風だとか、匂いだとか、けっこう平らだというと、多様性ってのではないのか、なんて。そこまで言っちゃいけないのかな。

牧野： ただ中国全体はねやはり、何というのかな、平らなのかどうかは別としても、流れていく文化というか、もの凄く激しく動いている、だからようするに都市はみんな城壁を作らないと、なだれ込んで来る人というのはすごいんだねえ、今はみんなそうだけ。だから

そういうのはきっと南米なんかには存在しないのじゃないですか。そうでもないですか。やっぱり流民化した人たちの流れみたいなものはあるんですか。

関野： 広範囲に首都に集まる、もちろん都市全体にはありますけれどね、でも国を越えてっていうのはないですね。国を越えた場合はみんなアメリカに行ってしまう。

相京： 都市が城壁を作るといのはなんとなく今話の中で特徴があるような感じもありますね。平らとその城壁が、万里の長城みたいな。

牧野： 山の上の都市はそれに類するものかも知れない。けどこれは他から来れないというよりもその人たちが一。

相京： 排除でもないですよ。自分たちが、こうそこへ住むということかも知れない。もちろん風土の話も関係してくるんですけど、やっぱり宗教の話をちょっと考えてみたいですねえ。

牧野： そうだね。たとえばシベリアは多分ロシア正教でしょうね。南米中米北米を貫いているキリスト教諸派が、特にカソリックとロシア正教っていうのは、そんなに遠くないとは思いますが、多分、にもかかわらず随分成り立ちは違う。

関野： やっぱりソ連時代に隠れて祈っていた人たちが、また今堂々と祈りを、毎日をやっているようなところに、僕はそこに泊まっちゃってきたんだけど、でも基本的に、なんとなく雰囲気は北米とかより、中南米はカトリックと似ているような感じがするんですね。

牧野： いやカトリックの分れが多分ロシア正教であることも多分事実なんで、むしろロシア正教の方が古いカソリックの形を残しているかも知れない。で南米なんかのマリア像に、例えばちょっと色をつけてしまうの方が現地化して。

関野： あそれはもうすごく徹底していますよ。アンデスなんかは。みんなこういい加減に改宗するんだけど、させられたっていう思いもあって、結局彼らアンデスの連中全部俺はカトリックだっていうのが多いんだけど、みんなクリスマス何人来れる、クリスマス知らないけれども、たとえばカーニバルをすとか。

牧野： みんな自分達のまつりの方に引き付けてやっちゃうんだよねえ。

関野： クリスチャンの行事の日に合わせて自分達の話を入れ、羊の話を入れという感じ。全部キリスト教の行事に合わせた日に、自分達のむかしながらやっている行事を、それもちろんとその神様の対象は山であったり、大地であったり大きな岩であったり。だからむしろ土着化している南米はすごい。

牧野： ズーっと前の貴方の特集テレビかなんかで山の上に登って・・・。

関野： あれは、まだスペインにピサロがやってきてからあと30年で500年になるんだけど、始まってから200年ちょっとなんです。それでアンデスの人間にもキリスト教を布教したけれど、なかなか言うことを聞かない。それで力づくでやってもダメだ。それで考えたのが、もうしょうがないから、彼らの土着の宗教を利用しよう。それは彼等は山、太陽・月の信仰っていうのはあくまでインカの貴族、豪族なんです。一般庶民は山とか岩とか大地とかを神様として祈っていたんです。

牧野： やっぱり日本とほぼ同じですね。

関野： 特に彼ら変わっているのは巨石ですね。岩に対しての信仰心が厚い。それをカトリック側が利用した。勝手に伝説を作ってしまったんですよ。一人の羊を追わされている子がいて、たまたまボロ服を着た同じ位の男の子がいて、食べ物もなくて困っているので食べ物を上げて、友達になって、ボロ服も何とかしていいものを作って上げようと思って、同じ生地で作って上げようとして切れ端をちょっともらって、お父さんにこれと同じ物を作ってやってって言ったら、そして仕立て屋に持ってたら、大騒ぎになった。何でかってこの生地っていうのはサントス、要するに聖人にしか着られない様な物である。司教まで噂が広がって、一度その少年を見てみたい、みんな行って見たら大きな家の前にいて、中に友達が近づこうとしたら、パッと消えてしまって、木の十字架がそこに残っていた。そのあとその貧しかった少年の家族に家畜が倍に増えたとか、そういう神話を作った。そしたらそこに奇跡が起ったって行って、みんなそこに行って、岩に来ていたんだけど、そのうちにいつの間にか十字架が目当てになって、いつの間にかそこにキリスト受難像が描かれていて、そこに礼拝所が今では建っていて、年一回十字架を建てるという祭りが始まっている。それが2100年位になる。

牧野： しかしヨーロッパから行ったカソリック系の坊さん達が作ったはなし、そういうことだよ。現地の苦勞を利用しながら。その融合で強制しても、まあ抵抗されなくなった。ただし現地の人にとっては、原住民の人たちにとっては自分達のそこがかなり受け入れられているから、まあここまでだったらしょうがないって言う認め方・・・。

関野：　　というか受け入れたほうは曖昧なんですよ。カトリックだって言っていて、やることは意識としてないんですね。自分はカトリックのことをやっているつもりなんですけれど、全然違う、自然信仰なんです。

牧野：　　それに比べたらシベリアなんかのロシア正教派は、隠れていたが故にもものすごく厳密に守っているんじゃないですか。

関野：　　そうですね。それともう一つはロシア正教、シベリアの場合は信じているのは大体中央から来たいわゆるロシア人。先住民の場合は相変わらず全く信じないか、アミニズム的なものか、シャーマニズムが復活した。起源ですからね。だから僕はずうっとシャーマニズムを追いかけて来た。シベリアでは。だからあんまりその、墓はいっぱい見たけれどもロシア正教の、だけどもあんまり。

牧野：　　正教そのものは。

関野：　　うん、お世話になったけれど、泊めてもらったり。だけどもシャーマニズムの方が宗教の原点みたいな。

牧野：　　多分そうでしょうね。それは例えばまた話がちょっとずれるけれども、統治やっている人なんかの中にも、絶対にシャーマニズムや原始宗教みたいな流れがものすごく強く流れていて、だから多分あの地域を貫いている宗教も、何か元々あった土着の何かの中に、宗教が入り込んでいるような感じも若干するんですけれども、そうでもないですか。

関野：　　たとえばチベットとかネパールの北部なんかにはボン教っていうのがあるんですけど、それは完全に土着だったのに仏教に影響を受けて、ホンと言う人もいるけれどボンが正しい。

牧野：　　あれはクルクルまわすやつとか。

関野：　　すごく実際的なんですよね。ようするにクルクルって一回廻すと中に入っているお経を一回読んだのとおなし。

牧野：　　むかし数珠を回転させながら、日本でもみんなで念仏を唱えたけれど、全部お経を一冊唱えるのは面倒だから、もうナムアマダブツならナムアマダブツを一個言えばいいんだっていうふうにして、千篇やるんだっていうね。だから入るところでそういう格好で、巨大大宗教は、現地に合った小さな地域の土着なんかとかみたいなものを巻き込みながら、多分広

がって行ったんだよねえ。

関野： シャーマニズムが典型なんですけれども、元々が、何か周りに起っている現象、特に宗教は、最初は病気とか、病気の原因というのをバクテリアが入ったとか、癌が出来たからとか、そういうことでなくて、何か目に見えない、自分達ではどうしようもできない大きな物がこの世の中であって、それが怒ったり喜んだり、シャーマニズムの場合はそれを精霊とっているわけですね。精霊とは、一般の人たちとは交信できない、ただその仲介になる人がシャーマンで、シャーマンになれば、シベリアの場合は太鼓霊ですね、太鼓によってトランス状態になって、精霊と会話ができて、それで霊を取り除いたり、逆に出ていっちゃった霊を取戻すとか、そういうことができるから治療もできるのでとなったわけで、それはすべての宗教にいえると思うんですね。そういう意味では科学も同じで、要するにわからないものを、いろんな現象を集めてきて、どのように説明するのが一番合っているかというのが定説になるわけで、そういう意味で説明原理として、精霊というのもシャーマニズムの場合置いた場に過ぎないわけですね。要するに何か周りで起こっている現象の説明の原理である。

牧野： すごく傑作なのが、たとえばヨーロッパの哲学の中で、一番昔から、しかも一番難しくって解けない哲学大問題は何だろうっていうのがあって、たとえば相手の苦しみとか痛みをどういう風に他人が理解するのか、理解できるのか出来ないのか、という問いがあるわけですね。それは原理的にどういふことを、要するに相手になった想像の中で、俺が感じている歯の痛みと彼の痛みは同じだろうって思う以外にはない。

その点ではお医者さんの前に患者さんがやってきて、腹痛いんですというって、本当にお医者さんはその人のことを考えて痛みを治すことができるのかどうかという問いは、それはバクテリアとか何かを考えれば、それを取り除いて上げるということではできるけれど、本当はあまり、本当はないんですね、きっと。

そうなるやっぱりシャーマンみたいな人がいて、その人と精霊とが交信できることは、すごいその人にとっては、衝撃的な治り方をする可能性があると思うんですね。

だから今のあまりにも科学主義は、言われた通り現象を集めて、一般理論を作り、みんなが納得するだろうっていう風になっているけれど、だけど精神病患者や病的である人なんかは投入してみればすぐわかるように、必ずしも治らないか、どうしようもなくなってしまう場合、あるいは痛みでも最終的に、たとえば薬を与えても絶対痛くて治らないって言い続ける人がいた場合、どうするかっていったら、精霊の方がはるかに治る可能性があるんですね。だからその点では、精霊だから非科学的である、ということではないような気がするんですよ。

そうなるやっぱり、こういう言説がでてくるわけだけれど、今日の朝、僕がテーブルの上に乗っているりんごをかじっているのを、家の女房が見てしまったのを僕が見たっていう言説

なんだけれど、結局あらゆる出来事は、最後は僕が知っているとか、僕が見たっていうところにみんなきてしまう。

で腹が痛いっていうのもヨーロッパ言語では、私は腹痛を持っているという、馬鹿げた言語を使わなければならなくなるんだけれど、腹痛なんか意識的に持とうとしていないのに、何で腹痛を持っているという風にってしまうのかというのに対する、つまり全てが自分に返ってしまうことに対する、決定的な疑いというのはヨーロッパの哲学の中にやはりあるわけ。

で、人はわたしを主題化するべきではない。つまりわたしが持っていると言うべきではない。それはようするにドイツ語だったら「エス」とかいう、あるいは英語だったら「イツ」っていう、そいつが与えたって言うべきである。そいつって何かっていうと神なんです、最終的には。

そうすると、シャーマニズムとほぼ同じになるのではないかと、僕は思っちゃうんですね。結局科学主義も、うまく言い替えてあるだけで、本質の所は変わっていないんじゃないか。だから腹痛が治るのは、多分お医者さんが薬をくれれば飲んで治るだろうと思いでいる俺達の治り方みたいものがあるのであって、いやかなりの部分でそれがあるのであって、そこでは関野さんの話で度々出てきたけれど、シャーマンが治ってしまう場合っていうのは、大いにありうる、という感じがするんですね。

関野： むしろ科学の方でも、WHOでも、どんどんどんどん伝統医療を見直してきているから、少なくとも心理的な影響で病気になる病気ってかなりあるわけで、それは結構シャーマンっていうか伝統医療に強いシャーマンも含めて。今一番多いのは不定愁訴って、僕調子悪いのに医者って検査すると何でもないっていわれる、でもおかしいんだからしょうがないじゃないっていう。

牧野： 自分がおかしいって言っても向こうは信じてくれない、数値に出ていないって。

関野： そういう時にやっぱり伝統医療というかシャーマンとか。

牧野： うん、だって話をよく聞いてくれるというだけでも治るかも知れないのに、数値だけあなた関係ないという言い方は変ですよ。こっちがいやだとかつらいとか落込んでいるとか言っても、聞いてくれない、とかね。

相京： あのう、死の問題というか、チベットで非常に鮮明に死の問題が出てきたと思うんですね。何でそのチベットで、関野さんは死を思ったかというのを、ちょっとききたいですね。今の流れの中で。

関野： その前に、チベットで巡礼者、五体投地のお坊さんとか一般の人とか見ていて、何で祈るんだろうか。それはみんな死と結びついていて、もちろん美しいことも言う訳で、生きとし生けるもの全てのために祈るっていうけれども、必ずもう一方では、来世ということを使うわけですよ。自分が死んだら来世に行くんだけど、いい来世に行きたい。それで死後の世界とか死ぬ前の世界とかいうのに関心があった。本当に死んだらどうなるだろうか。僕はもともとそんな、死んだらやっぱり何もなくなっちゃうんだろうなと。やっぱりそんな非科学的な、いやもちろん小学校の時は、地獄の絵をみせられて、牛をいじめたら地獄で牛にいじめられるぞとか、嘘ついたら閻魔様に舌をとられちゃうんだとか、地獄の古い絵をみられない、もう絶対悪いことしない、嘘をつかないって思うんだけど、でもそのうちにまたすぐ嘘ついて悪いことをするようになるんだけど。

あのやっぱりそういう教育を受ける、死後の世界がないような、この前学生にたまたま死後の世界を信じている人といったら、パラパラ、じゃ全く信じていない人、パラパラ、信じていないけれどももしかしたらあるかも知れないと思う人といったら、バーっと。僕もそうなんですよ。もしかしたらっていう、でもないだろうと。

でもなんでこの人たちは、そういう風に信じていられるのだろうかとか。死後の世界がまず興味があった。もちろん僕は外科医だから脳死の問題があって、死の判定を、今生まれる時の判定も問題になっているけれど、死の判定を、こういう所ではどうしているのだろうかということが、興味がすごくあったので、ヒマラヤのネパールの北西部で長くいたんで、それが分かるかも知れないと思って。

牧野： あれはテレビなんかを見ても、聖なる山みたいなものが存在しないと、登場しないかも知れない。つまり日本のここでいくら見ても、死とか生というのは、いっぱい本当は交通事故があるにもかかわらず、なんかむこうの救いがあるって考えられないような気がするんだけど、あの山なんか見たら、子供の時からみたら、絶対俺はあの山の向こうの辺とかなんか考えて、あるに違いないと思うような気がするなあ。

関野： もうひとつは最近の日本の場合は、死体を見るということがほとんどない。交通事故あるっていてもすぐ片づけちゃうし、まず、おじいちゃんおばあちゃんが死なないし、三世代同居というのが少なくなっているし、やっぱり死ぬっていうことが身近じゃなくなっていることがやっぱり影響があると。

牧野： この間のNHKのテレビじゃないけれど、豚なら豚を殺すっていう、生きていた奴を殺してっていうね、こういうものが存在しないので、本当に死ぬっていうのは何なのかとかないですよ、きっと。だからあの美しい山と、そういうたとえば、現実に鶏とか豚とかなんか殺すみたいなことがあれば、絶対に死んだらこうなるというようなことがやっぱりあるような気がするんですけど。

相京：　そういうようにするに象徴、南米の石という話もされましたけれど、山ってというのは、あれを見るときもう頭を下げてしまう。

牧野：　強烈な山だものね。

相京：　絶対さわってはいけないようなね、そこの山に登るというのではない、それは見るものである、祈るものであるという、ふっとそうになってしまうと思うんですね。

関野：　アンデスでもそういう山はけっこうありますね。

牧野：　やっぱり聖なる山ってというのは絶対あるよね。

相京：　見た瞬間それを思うっていうのは沢山ありますか？それとも・・・。

関野：　いやそんなに沢山はない。ただアンデスの場合は、そうだ、チベットもそうですね。ああいうカイルスみたいに、どーんというすごいのもあるけれど、各村で、地区で聖なる山っていうのがある。

相京：　日本でいう富士山みたいな、そこらじゅうに富士さんがある。

牧野：　なんとか富士みたいな。

相京：　うん、その辺もちょっところ、風土と宗教じゃないけれども、なんかこう特色みたいなものがあるんですかね。要するに富士山的な形が日本人は、日本人というか、この列島の中にいる人間が何か意味を持っているとすれば、他の場所っていうのはなんかありますか。つまり、すくっところ立つ、ようにするに特色みたいな、南米共通性の特色みたいなものってありますか。南米だったらこんな山っていうのとかなんとか。

関野：　あ、それはやっぱり峻厳さというか、はっと思う山って、それ共通していると思うんですよね。険しさ。

相京：　やっぱりなんか寄せ付けないっていうようなものを。

関野：　そうね。

牧野： 天から神様が下ってくる感じだから、例えば依代として巨大な樹を伝わってくるとか、石とか富士山もやっぱり上から降りてくると感じだけど、何か見る限りボワンとしていて、とてもこう何か降りてくるとか、昇って行くという感じじゃなくて、ボワ〜んと。ボワ〜んと。

相京： くと。そうするとその宗教性というようなものは、シベリアから来るっていう話がよくあるわけで、シベリアが平らとすれば何かこう目印みたいなものって、ユーラシア大陸に行っていましたか。

関野： シベリアはもう高くなくても、平らといえば平らなんですけどね、何かこう、シーンとしたこう森があるでしょ、雪で覆われた。それだけでなんかこう。

相京： じゃ目印は星ですかね。例えば人が方向性とか目印にする山があったり、ひとつのこう、どっちの方向に行こうとか考えた時。

関野： あ、それはやはり山は当然あります。

相京： 象徴的なものというのは別に。

関野： ドーンとこう、富士山とかカイルス山のみみたいな、人を圧倒するような山はあまり見たことないですけど。

牧野： 何となく遠くにこうやって見えているというふうなんでしょうかね。だからそれを見ながらこっちとか行くみたいな。特に空の上から飛行機でシベリアの上を何回も行ったけれども、さっきのシーンじゃないけれども、なんだかよく分からない。

関野： シベリアのヤクーツクというレナ川のほとりにある町があるんだけど、ここで有名なシャーマンが三人いて、どれに会おうと迷ったんだけど、結局ひとり外科医でシャーマンという女性がいたんで、その人がシャーマニズムについて科学的な説明を出来るかも知れないんで、その人に会うことにして、そうしたらもう外科医を止めていて、60歳ぐらいの女性なんですけれど、シャーマンで、伝統医療研究所、伝統医学研究所というのが、ヤクーツクのあるサハ洲で作っている。そこの副所長をしていて、シャーマンの治療を見たかったんだけど、ヤクーツクではできません。ところが自分の生れ故郷の町にいくと患者が待っているから、そこに一緒に行きませんかって。なぜヤクーツクが駄目かっていうと、まずこういう経過で駄目なんです。ひとつあるわけですね。やっぱり人間が、そこに住んでいる人間が、共同幻想を描いていないと駄目なんです。だからアマゾンの森の中に住ん

でいるヤマノミの所に、そこにもシャーマンがいるんだけど、同じ治療をしたから効くかといったら、それは駄目なんですね。逆にヤマノミのシャーマンがシベリアに行っても駄目なのね。やっぱり同じその人は、自分達の精霊と交信が出来るんだっていう信じ込みがあった時にできるわけで、そういう人はヤクーツクの中では少ないわけで、そういうところでは効かない。

牧野：やはり共同幻想の中に絶対いるわけだね、そうするとね。

そのさっきの西洋の哲学で、他人の痛みは分からないみたいなことと同じことなんだけど、やはり共同幻想的なものがあるから、きっと要するに会話が可能になり、本当に痛みは痛みとしてシャーマンには分かり、対話もできるみたいなことになるんだろうけれど。

関野：もうひとつ言えるのは、治療してて、シャーマンが病気になっちゃう。

牧野：やっぱりそうなのでしょう。だから恐山のイタコでも、結局その人になり代わるじゃないですか。きっと多分、やっている現場はストレートに見たことはないけれども、精霊と語る時には、その人を代表してちゃんとその人になって語らないと、うまくいかないんじゃないか、で、それになってもらうと、痛みもその人に移って、精霊の方に戻せるみたいなふうになっていくんじゃないかと、ずうっと思っていたんだけど、それに近いものですよ、きっと。

相京：身代わりに、きっと。移し身みたいに。

牧野：西洋人はそれができなかったから、そこが切断されて、神との会話を個人で求めざるを得なかったけれど、集団的な共同性の中にある場合は、誰かがきっと代わりになれて、痛みがとれちゃうみたいなことがきっとあるんでしょうね。

関野：だから西洋医学とシャーマニズムの決定的な違いは、西洋医学は普遍性がある、シベリアに行こうとヤマノミのところに行こうと、こういう薬があれば誰にでも効く薬だと。でもシャーマニズムに関しては、そこじゃないと駄目だ。

牧野：何処でも効くということは、逆に言うとあまり効かない。

関野：アハハハ。あとは結局最後に解ったことは、その人はシャーマンになってなかった。お父さんが有名なシャーマンだった、で弾圧されたんでお父さんは、シャーマンになりたいっていう娘に医者になれって言って、ところが言われたところがお父さんに見てもらった人っていうのはいっぱいいて、あんた教えるからやっていけて、あんたに能力はある筈だ、

でもそのお父さんに言われたのは、なりたいたいと思ってなれるものでなくて、精霊に呼ばれないと、証明されないと駄目なんで、それになれるかどうか分からないから、あんたは外科医になりなさいって、未だに証明されていない。けどもお父さんの弟子だった人とか患者たちが一生懸命サポートしてやっているんですけれども。でも彼女は彼女なりに、見ていると本当に睡眠療法とか催眠療法に近いもの、あるいは心理療法なので、彼女は精神分析とか催眠療法とか非常にうまく精神分析している、全部勉強しているんです。最後に、じゃあ証明されてない、神に召されていないんだったらあんた何者なんだっていったら、サイコセラピストだって。だからようするに前に治療しないって言ったのは、現在のシャーマンの治療をしないと、そういう意味だと思うんです。

牧野： もしそこで本当に患者さんなら患者さんに、そこまでこう接近できれば、色んな意味で治療法が開発できるよね。例えば普遍的な薬みたいなもので行ける部分と、そうじゃなくて、精神と薬の合体みたいなことでいける部分と、全然そうじゃなくて、よく聴いてその人になり代われればその人がもう助かってしまうみたいなどころと、色んなところからほんとはできちゃうよね。

関野： あとシャーマンもそうだし、沖縄のユタとかみんなそうなんだけれど、必ず重病を一回やっているんですよね。健康な人、わたし一回も病気なんてしたことないって言う人は無理なんです。

牧野： やはりその人になりきれないんだろうね、きっと。
そういう人は、近代医学というものがどういう風に今後なるかとかいうことも、若干ヒントもあるような気もするよね。

関野： 今までの強みはなんと言っても即効性ということ、頭が痛い、薬を飲めば20分30分すれば効いてしまう。そうすると、早急にじゃあ西洋医学はすごいんだって思い込みができると、眠れないんだけどという小麦粉かためたりしていると眠れたり。

牧野： イスラム教はどうですかね。

関野： イスラム教は医学の方はがっかり。イスラムの医学の本があるんですね。たまたま知り合った宗教の話を聞いたんだけど、聞く度にお金がかかるというめずらしい部分がちょっと駄目だった。

牧野： ああ、なるほどね。多分医学、そうね、医学はそうかもしれない。けど話の中に立ちあってみて、人間の平等愛みたいなものについての、イスラムの平等心と、ひとりひとり

の暖かい眼差しみたいなものは。

関野： それはやっぱりまわった中でも一番すごい。それぞれ優しさはあるんだけど、ただムスリムのイスラム教徒の場合は、義務感もあると思うんですね。これを、善行を行わなければ天国にいけないとか。

牧野： だからいちばんキリスト教やなんかと違う所は、ストレートに喜捨にしろ、何にしろ巡礼にしろ、出さなければならぬから、心の中でだけお祈りしているわけにはいかないって部分が、多分誰が見ても、おお同志、みたいな仲間、いくところだと思うんだけどね。キリスト教は多分神と個人的に話し合っただけで信じますって言うていけば済むみたいなんだけど、イスラムでは口に出さなければならぬし、一日に何回かはメッカを拝まなきゃならぬし、そういう外に表れたもの以外は判断できないという、ものすごい現実主義的な理解と、それからすべてがやはり、コーランから始まるイスラム法が社会的な倫理、宗教的な意味みたいなものがみんな一貫しているから、その点ではスッキリしていると言えばものすごくスッキリしているし。

関野： ストレートに神との関係が、キリスト教の場合中にイエスとかいろんなものが入っているんだろうけれど、そういったラマダンの断食の時に、断食サボってもいいんだよというんだけど、何が彼等言いたいかっていうと、それは俺を騙してもしようがないんだよ、要するに神との関係だから別にサボったら神が見ているんだから、あんた終末の時に天国に行けないかも知れないよっていうことなんですね。いくら誤魔化そうとしても、別に誤魔化したければいくらも誤魔化せばいい、俺は知らないよってね。

牧野： それと厳格なルールが設定されているイスラムは、ルールが設定されているが故に、ルールの無い所とか隙間はどのように対応してもいいというふうに、逆になるっていうそういう説もあるんだけど、キリスト教のように汝の隣人を愛せよというふうな、あいまいな定義だけであれば、もう一体誰が隣人かも分からないし、あらゆるところを考えざるを得ないと思込まれる。だけど見張っている神様との関係で落ちるかも知れないけど、要するにこういうルールであるっていうふうに決っていれば、やり易いと言えばやり易い、分かり易いと言えば分かり易いスッキリしている。

関野： スッキリしているのとあとは、厳格なルールなんだけど、戒律は厳しいっていうんだけど、僕は五行なんかみても、普通に信仰深いひとだったらそんなに苦痛は伴わない、僕は断食したって、まあお腹空くこともあるけれど、旅しながら夜は食べられるわけですよ。別にお祈りするの、人に施しするの、要するに人間の見方の違いというか、社会主義はあまりにも理想的な人物像をみんなこう、人のために利他的に動くとか。やっぱり同じ

条件だったらサボっても一生懸命やってもおなじだっていうんで、人と人の関係もそうではなかったらやっぱりサボろうとするって、そういう風に思わないで考えたわけでしょ。意思が強くて、理想に燃えてって一応考えたんだらうけれど、多分普段はそうじゃなくて、むしろ弱い人でも、これだけやれば天国に行けるよって、マニュアルを与えてくれたような気がする。

牧野： それはそうだ。日本人の多くが、一番イスラムが解らない苦手だっていうんだけど、小室直樹なんか書いた本を読むと、イスラムは知ればそんなにむつかしくない、皆に言われるわけですね。むしろキリスト教なんかの考え方の、汝の隣人を愛せよとか右の頬を打たれたら左の頬を出せみたいなね、そんなもん普通の人間ができるものではないし、キリスト教は実はそうやって言いながら、汝の隣人っていうのはキリスト教徒だけを意味していて、異教徒は殺せという、そういう風にはイスラムはなっていないわけですね。だから、例のエチオピアのキリスト教の集団が、そのままイスラムの中に残っていたんじゃないか、あれ、だからそういうのさえも許してしまうイスラムというのは、いちばん多分何もできない人でもできるみたいなところでいこうと。だからそういう意味では全くキリスト教なんかと逆の意味の、すごく人間主義みたいなのがあって、たぶんだから、あらゆる奴がきて「くれ」みたいな。たしかにあれ寄付を四分の一しないとね、ケチったりウソついたりすると地獄に落ちるからね。だからもう誰でも家に寄って行けみたいな。けどこれは、俺の田舎のばあさんたちが道を通ってる人を、ちょっと寄ってお茶でも飲んでいきなさい、お菓子食いなさいとか漬物食いなさいってやってるのね、多分元は割と多くはね、あったんじゃないかね、むしろ追い込まれて、ものすごく食い物の少ないようなところで、こうやらなきゃならないようなところだけはね、違う汝の隣人を愛せよみたいなことを作り出したったかも知れないけれどね、本当はそんなことを言わなくたって、やれてたんじゃないかなという気はちょっとしましたね。

相京： 自分も群馬の山の中で生きているから、やっぱりバチが当たるっていう言い方っていうのは、色んな意味でありましたね。別に仏教だから何かっていうんじゃないで、バチが当たるっていうのは、いいことやれば良いことが起ってくるっていう、改めて宗教って考えるよりも、それは当たり前みたいなことは間違いなくありますね。だから、いろんな角付けの人たちが来ても、他人が来ても、やっぱりそれは何かをやっておかないと、バチが当たるって感じの世界ですね。絶対だから我々の世界にもあったし、記憶として我々の中にも。外れるかも知れないけれど、そういうのっていうのは、何処かに出発点としてのものがあるって、広まっていったのか、それとも人間、人であれば、どこでもそれが起こる感情なのかっていう。もちろん宗教、キリスト教の場合とはいまおっしゃったように、若干の色合いが違っていたとしても・・・

関野： 僕が接触した人たちはそうだけれど、中国人はどうかな。中国人の悪口ばかりいってあれなんだけれど、そういうのは一旦消えてしまうと、とんでもないことになるし、日本もそれが薄れつつあるのではないかな。結局そのうちに気がつくっていか、ようするに中国人も今は快適で便利で物質的に豊かで、ということ望んでいるけれど、ある程度手にしたら、あ、これだけじゃ決して人間は幸福になるとは限らないんだ、充足感を持つとは限らないんだって、気が付いた時にどうするか。

牧野： 中国でもちょっと田舎に行ったら、壁に日本でいうと一陽来復みたいなことが書いたり、幸せを望むようなことが書いてあったり、ある意味では自然を唱えるようなことが書いてあるのを見れば、あるいは知者の心はやはり書かれてあったりするのを見れば、日本の金剛稲荷のみたいなものがね、こういうものが全部なくなったとは思えないよね。田舎になんか行くとね。

相京： 道教のなんてメチャクチャありますよね。

牧野： その点では多分、ある段階までいったら、やっぱり年寄りを中心にして、そういう生き方じゃ駄目だっていうような人がいたり、問題化すると思うんですね。で多分日本でも先ほどからいわれていることだけれど、昔だったら宗教じゃないけれども、律儀に生きていくっていう生き方があって、その人がなんとなく自分が信じてなくても神社の前にいったら帽子をとるとか、こういうふう生きていく人がいるわけですよ、信じているいないじゃない。だから銀行なんかむちゃむちゃなことをやった時に、これはいけないんじゃないかと言って、内部告発する人がちゃんといたんですけど、そういうのがぜんぜんなくなって、とにかく会社の他には何でもいいんだってなった時には、もうやれる道徳倫理も、モラルハザードっていう完全崩壊が起っちゃっている。これは資本主義にとっても決定的にピンチであって、つまりそれこそ、マックスウエーバーのプロテスタンティズムの倫理とか何とかじゃないけれども、かなり律儀に何か物売っているときしか金儲けは完成しないですけど、外れてしまい、例えば高利貸だろうと、なんでもええんだみたいなものをやっちゃった時には、もうメチャメチャになっちゃうじゃないですか。で誰も信用しなくなっちゃう。そしたらもう信用の世の中である資本主義がようするにぶっ壊れてしまうわけじゃないですか。だからアナーキーな状態しか存在しない。アナーキーは望む所だけれど、要するにそれは政治的アナーキーな問題であって、経済が大混乱になれば、ただ単に貧困な人がより貧困になり、金持ちがもっとうまくやるというだけの世の中になってしまうんですね。だからもう中国で出てるのは北京なんか全くもう金ですもんね。だからお金持ちは日本よりはるかにお金持ちみたいな人が登場したり、貧困といたら、もうとても信じられない貧困のみたいになっちゃってるものね。多分どっかで先ほどから言われているように、それが宗教なのかどうなのか判らないけれど、やっぱり宗教みたいなものや、宗教周辺のもの、

ガーって頭をもたげるっていうのは、すごくよく解るし、日本でもオウムとかが流行るのも、若い奴の中でも、やはり心の中が奪われているんだよね、だからどんなに嘘っぽい宗教でも飛びつく状態って、若い人の中にあるよね。だからバランスなんだろうね、きっとね。

相京： 話が風土から宗教、そして多分これからどんな社会にとって話にいきそうだと思うんだけど。

牧野： もういってる、僕のメモに書いてある。

相京： 非常に気になったのはヨルダン溪谷、要するに人類が行ったのと、同じところを鳥が行ったというのが、ものすごく象徴的で、ああいう場所に鳥も人も行って、そしてこう拡がって行くというのに、感動してしまう。

関野： その鳥は写真を撮りましたけど、普通の鷺。

相京： 要するに人類が通った場所、同じ辿った土地とか。

関野： 道を辿っただけじゃなくて、ヨルダン溪谷の場合は地溝帯と環境が似ているんで、一時そこにおさまって、それからしばらく休んでから世界に散っていった。そこに鳥も来れば人も来た。

相京： 大変なんか象徴的で、グレートジャーニーを何で言い表わすかと言ったら、ひょっとしたら何か最初が、どういったらいいかなあ、上手く言えないけれど象徴的な感じがします。

牧野： それはあれですか、風が流れていて、鳥は風に乗って行くから、ワーって行くんですか。そうではない。

関野： いやそこまで僕はわかんないし、聞かなかったんですけど。本当に小さな博物館だったんですけど。可能性として考えられるのは、やっぱり海の上を飛びたくないというのがある。結局西側を通る。でも東の方からやって来る人はもっと東を通ってくればいいのに、なんでそこにずーっと。

牧野： うん、ただあれかなあ、やっぱり人間って食わなきゃいけないけど、同時に飲まなきゃいけないよねえ。水の確保っていうみたいなのがやはりあるでしょうねえ。だから例えば日本だったら川に沿って、その海の辺から川に沿って登って行って、集落を点々と造って

いくといつか、そういうのあるじゃないですか。すると海と、そのところの距離とか何かがあるのかも知れない。やっぱり大量に飲み水を持って移動するっていうことができないとしたら、どっかで飲み水を調達しなければならないですよ。

関野： 結局そこに人間がたむろしているだけの水はあったから、水との関係はけっこう強い関係があるのかも知れない。

牧野： 中東にも行ったことがあるんだけど、中東では今頃の話だけれど飛行機でビューッと降りて行くと、他のところが全部砂漠化しているのに、そこだけ緑があったりして、ああやっぱりこういうのが点々と、いや昔はもっと木があったのだろうけれど、特にヨルダンの辺とかなんかは森林地帯であったかも知れないって説もあるくらいだから、木があったのだろうけれど。

関野： やっぱり人間が住みやすいところと、鳥が住みやすいところと大きく違うから。緑はともかく水がなかったら絶対生きていけない

牧野： ねえ、絶対おなじ所なんだよね、きっと。人間も緑があったり、水がなかったらきっと生きていけない。

相京： これまでにも話に出てきましたが、国家や国境についてはどうですか？

牧野： 多分、ほとんど僕ら同様島国みたいなところに住んでいて、あまり国境線なんて特別意識しない。だけど同時に国境線で接している国家同士は、紛争中以外は、あんまり本当は国境が意味をなしておらず、その辺に住んでいる人はさっきの南米のようにシュッシュッと越えたりする。

関野： アマゾンなんて全然国境は関係ないですからね。自由に行き来していて、勝手に歩いている分には、たとえばコロンビア、ブラジル、ペルー国境って三つが重なっているところあるんですけど、自由に行き来して。だから全然。だって国境あってもなくても関係ない。その土地に生きているという。

牧野： 僕はカンボジアによく行くから、カンボジアとベトナム国境の、特にホーチミンルートのところなんかは本当に2m位向う側なんで、向こうのベトナムからは見張っているかのように見える。それはこのごろで、なんかカンボジアとベトナムの話もうまくいかないかと思うけど、かつてはそうじゃない、非常に長い国境線にそんな塀を作るわけにもいかないし、全くの自由往来でしたよね。アフリカとか中東の無理矢理引いた国境は問題化する

けど、あとのところは、国境って本当は地図の上に線がないんじゃないのかという。そうなんだったら世界中にもものすごく塀の材料がいるはずだというね。だからこのごろイスラエルが占領地を囲っているというのはね、ちょっとやっぱり異様な感じがする。

関野： 南米をずっと旅してて勿論いろんな密輸とかあるから、税関もあるのだけれど、アマゾンに行くとそれは関係なくなるし、大体税関があるところでも、チリ・ペルーだったら、チリ・ペルー人に関しては全然関係ない。それはズーっと続いて、メキシコ・アメリカでガンとおきるんですね。

牧野： だって毎日国境を越えて働きに行っている人だっていっぱいいるでしょ。中村哲というペシャール会というパキスタン・アフガニスタンに行っている彼が講演で言ったのも、数百キロか千キロか忘れたけれど、パキスタンとアフガニスタンの国境は山で仕切られているけれど、そんなものどこにも見張りがいるわけでなく、自分たちはロバかなんかに乗ってみんな越えているのであって。だから、でっかい自動車などが通れる所では一応国境らしいことをやっていることもあるかもしれないけど、多くの方はそんなところは越していかないんだよね、きっとね。そこからすると、アメリカだけはこだわるかもしれないけれど、メキシコにとってみれば、やはり国境などないほうがいい。アメリカの方はきっと必要でしょうね。だからお金持ちのほうはきっと国境が必要で、日本ももし陸続きであるならば、ようするに中国やなんかから変な人が来るといやだとかいって、国境をつくろうとするけれど、中国の方にしてみれば今度はようするに、もっとむこうのチベットやなんかあの辺には引くけれど、日本の方には国境なくて流れていったほうがいいんだということになるんでしょうねきっと。

相京： 非常に極端なことを言いますが、いわゆる革命だとか世の中が変わるという時は、どういう方法なんだろうかというのはよく思うんですね。たとえば宗教みたいな話がさっきあって、本当にその人たちが死の世界みたいなものをどれだけ考えるかということと、いったら、どういうことで革命が起きるのだろう、世の中が変わっていけるんだろうて。ちょっと話がとんでしまいますかね。

牧野： 僕にとっては革命というのはいままでのイメージとは違って、やはり自動車社会から脱けるというか、若干脱自動車社会になるということ、そのことが結局最初の話の時速5キロなのか時速80キロなのか、もう少し80キロの方が、10キロくらいか20キロくらいに落ちて、つりあいとれることが変化であって、今のまま両方が両極端にビューって行って、自動車社会がどんどん速くなり、片方がまだ5キロのままで行くという、関野さんみたいに耐えられる人がこの両方にまたがるというだけでなく、ほとんどの人が両方とも生きられるというふうになった時が変化かなあと、僕は思うのですね。でその点ではずっと思

っているのだけれどやはり自動車をやめろと言っているのではなく、自動車社会だけだという考え方から脱げなければならない。そのことは同時にたとえば化学医療だけだという考え方からやはり脱げるとか、宗教は全部ダメじゃなくて、宗教的な考え方も人間のある種の文化や知恵として、共同体の中で背負うみたいなことが、ようするに許されるような社会かなあ。

関野： 新幹線が今2時間半でしょう、東京一大阪間、そのうち1時間になるとか、僕はそこまでやる必要があるのか、それで時間のこと人間の動くスピードのことを考えたのですが、とめどもないというか、そのうち30分になってしまうのかもしれないけれど、もうほどほどにしたらって。

牧野： これは絶対そうだよ。新幹線に乗っていて中で文字が読めたり書けたりするスピードっていうと、今の200キロの速度が極限で、すでにのぞみの300キロ近くなるともう書けなかったりするんで、あれ以上速かったら僕等もう宇宙服みたいやつ着ていくしかない訳だ。そんな速く行って何か意味があるだろうかって考えたり、あるいは飛行機で行っても新幹線で行っても車で行ってもね、結局その移動距離はある疲れをもたらすのであって、いくら速く行っても。それだったら昔のように、名古屋から東京に6時間とかなんかかかって来て、日帰りではなく3日くらい泊まって、久しぶりの東京だとかいって一生懸命いろんなことやってから帰ったほうが、豊かじゃないかって時々考えちゃうのですね。

関野： そうなんですね。だから8時間かかって東京一大阪来た時と、2時間半で日帰りなんかして、少なくとも普通のビジネスマンなんかは何かメリットあるかといったら、元は2泊か3泊してゆっくり来れたのに、日帰りが当たりまえになっちゃって、それでスピードアップしたからって仕事が減った訳じゃないしね。給料が上がったわけでもないし、誰が得しているんだろう。

牧野： いやよくわからん。

関野： ということですね。

相京： 全員が急いでいるという。

関野： 全員が急いで、急いでいる理由は、本来は効率をよくすることの本来の目的は浮いた時間を楽をしたい、楽をして帰りに映画を観たり本を読んだり音楽を楽しんだり、という方に時間を向けるべきで、そういうつもりだったのだろうけれど本来は、そうじゃなくって時間が余ったらじゃあ次の仕事にまわそうっていうね。

牧野： だからね、関野さんが南米に行っている時に流れている時間の感覚と、日本にいる時の時間の感覚ってすごく違うと思うんだけど、なんかやっぱり忙しいんですね。忙しい割には何かあるのかっていうと、たしかに物質的には恵まれているように見えるけれど、コンビニとかスーパーとかデパートに買物に行ったら物がいっぱいあるように見えるけれど、これこそ前に言われた通り、何で作ってあるのか判らないような物や、これ食っていいのかと思うような物しかないのは、何か逆みたいな気がするんですね。本当だったらものすごく時間をそういうことで稼いで短くしたので、ゆっくり家で何から作ってるかわかるものを作って食うっていうのだったら分かるけど、何か変なんですよ。全部がこうやって駆け足なんですよ。

関野： 困るのはさっき言ったように、まわりが東京一大阪2時間半の世界になると、それを強制されるっていうか。

牧野： ゆっくり行くことができなくなっちゃう。

関野： まわりがパソコンをみんな使いだすと使わないと仲間はずれになる、携帯もないと公衆電話をどこどこだって探し回らなきゃならなくなってしまうんですね。

牧野： だから、意外と何か自由そうに見えるけれどそうでもなく、生活スタイルとしてはものすごく幅のない、あるパターンにはまらなきゃいけない。それに比べると何か我々としては、未開であるとか発達していないとかいっている所の方が、今日は狩に行くかどうかとか、じゃあ行くかあって、今日は一発打ったら今日はこれでやめだって、すごく自由に生きているような、やっぱり自由に生きているんだよね、実は。

関野： よく例にだすのは、アマゾンの人たちと一緒に旅行していると、一ヶ月とか二ヶ月とかの旅になると、自分一人じゃもちろん食糧とか装備機材をたくさん持っているのだから背負えないから何人か一緒にきてもらうんだけど、みんな面白いくらいぞろぞろついてくるんだけど、彼ら嫌いなのは荷物を背負って歩くとか、それから筏を造る、筏を造るのは簡単に造ってワイワイやってるんだけど、それを下るのは好きだけれど、逆に登ってくる、引っ張ったり押したりするのはそんなのは疲れる、だから駆け引きになる。長い時間一日をこう長く移動したいから、5時くらいまでいきたいな、彼らはもう昼でやめようよって、腹減った疲れた、もうクタクタだからやめようよって、それ取引なんですよ（笑い）。で大体2時から3時くらいでしようがないやめるかって。で、そこで彼らは、ああもうクタクタでバタンっていうんじゃないんですね（笑い）。喜々としてさあ行くぞって、弓矢とか何か持って走って行くわけですよ。で、やっぱり面白いんですよ、そのこと自体が。

牧野： だから荷物運んでいるのが仕事じゃないんだって（笑い）。それはいやな要素になるんだから。

関野： だからそれが象徴的なんだけど、彼らは何で狩が面白いのかっていったら、英語でゲームっていったるように、ホントにその場で成果が上る、今が楽しい。だけど農耕民の場合は半年後のために今を一生懸命やってるっていうのが、産業革命以降はさらにひどくなってしまって、現代社会だったら幼稚園から、いい中学、いい高校、いい大学、社会に出ても、いい社会に出てもポストとか。

牧野： でいい奥さんもらっていい子供つくって、最終的には小学校の時からいい死にかたをを考えてって（笑い）。

関野： いまやっていることがいつのためかって、いつも将来のため。

牧野： そう、なんか先へ先へと先送りだよ。

関野： 先送りと、スピードとか効率と関係あると思うんですね。効率は上げるために本来は今を楽しむためなんだけど、それがいつのまにか効率のために効率になっている。だから南米の人が風土としていちばん違うのは今を楽しんでいる、結局将来の備えをあんまり考えないことなんだけど、少なくとも今を楽しんでいる。

牧野： だから日本の将来を考えた時、年金制度を心配したり、リストラをされたり（笑い）。何のために将来を考えるのか。

相京： あと共同性みたいなものっていうのは例えば医療の話などもできましたけれど、ある一定の共通認識みたいなものが、地域共同体みたいなものがなくなっていくとすれば、なんか作ろうというような発想がつかますか、それともこのまま行くしかないという、何か気がつくというか、必要だったらそういうものは生まれるというふうに思いますか。

関野： よくいろんな所で流行っている地域通貨みたいな、部分的なものから始まって、最初からここに理想郷を作ろうよではなくて、あるところから始めていって、それが他の所まで波及していく形で、国はもう。

相京： すると例えばそれは北海道のエコマネーなんていうのが、北海道、あるいは介護です、高齢化社会みたいなところで、いちばんひよっとしたら、華やかではないところで生

れてきているというふうにお考え方なのでしょうか。つまり介護といっても、老いとかあるいは高齢社会というのは、もう迫ってくるから、そこで必要だから備えていくというような発想になっていくと思うんですけども。

関野： あとはやっぱりもうさっきのスピードの問題だけれど、スピードダウンしないとうようがない。

牧野： たぶん例えば、人間ご飯食うときもそうだけれど、満腹以上にはやっぱり食べないのであって、だから永遠に拡大するという欲望を考えるほうが、何かどこか間違っているんですね。するとスピードは人間にとって絶えられるスピードはここまでっていうのが多分あって、だから東京一大阪間も、30分というのは絶対あり得ないのであって、考えてはいけないんじゃないかという気が、僕にはするんですね。

関野： だけど一時間はもうやっているわけですよ。

牧野： やろうとしている。だけど、恐ろしいやね。

関野： 乗物だけじゃなくて人の動き全体を効率優先で、みんなを80キロの動きというか、それは多分みんな人間のスピードに合わせて、人類の辿った600万年の歴史で、少なくとも599万年は5キロのスピードできたと思うんですね。それがやっとなら馬とかラクダを使うようになって10キロに初めてなったので、それが蒸気機関を使うようになって突然こう。

牧野： 急に。

関野： ええ、それとエンジン、それからジェットエンジン。その時に急激にこういう状態で、こうずうっと99パーセント以上こう来たのに、急にグワーって来たんで。それと効率化とか、他のものが一緒に、時間のスピードアップと共に、他のものも全部効率化に向って進んで来たっていうか。情報にしてもそうだし、電気器具にしてもそうだし、全部便利な効率化に向って走っているんだけど、もういい加減にいいんじゃないのっていうね。それよりも効率化と共に資源も使うんですね。

牧野： 巨大なね。

関野： ええ、だから落としていかざるを得ない。その代わり生活のレベルはどうしても落とさなきゃいけないんだけど、それは我慢するしかない、じゃないかなと思うんです。

ね。

相京： 悲観的なことを言っただけですけれど、例えば地球の資源が有限化だ、一方では中国の人たちがワーっていきだろって感じになると、どこら辺が臨界点だと思いませんかね。何か悲観的な話になってしまうんだけど。

牧野： 多分それはさっき言ったように、先進国といわれる国、特に北のほうの先進国といわれる国の状態が、やはり文化の問題としても、スピードをいくら上げて効率化を上げても、それは資源を使っている量と、その効率や豊かさとか、幸せ像みたいなものが割が合はんという状況がすでに来始めているのだけれど、だからそのところで、どんどん将来に幸せを積み上げて来たはずなのに、将来はもう幸せどころか真暗闇だっというイメージが先進国に広がって、やはり自動車を若干まあスピードを落とすなりせよとか、あるいは新幹線はどんどん速くならなくてもいいと、いう風になって初めてちょっとずつ、逆に中国はまだその頃は車に乗りましようみたいなことをやっているかも知れないけれど、切り替わって行って、それで中国もある一定のところまで来た時に、こんなこといくら進めても幸せにどうもなれんぞって切り替えると今度は、もうちょっと多くの人に乗ったりしてというふうになって行って、変わっていくのかなあ。

だけど少なくとも、関野さんも俺も相京くんもすでにもう、このスピードをどんどん上げて行って効率を上げて仕方がないんじゃないだろうとか、どこかで止めなきゃいけないんじゃないかっていうふうにと考えている。生徒なんかだっと思ってるところを見ると、多分10年前20年前には、非常に特殊な人しかそんなこと言ってなかった、いやほとんどの人が言ってなかったってなかった。でもっと効率を上げたほうがいいのかね、もっと電気をバンバンに明るく点けた方が良かって思っていたんだと思うものね。

あるいはそういう意味では、仙台に今頃行くと、電球が百万個もあるいは二百万個も木にぶら下っていて、木が眠れずにもうくたばっているけど、今年ね、やっぱり不況のせいもあってね、半減したんですねえ。今まで一番最高が二百万個なんだけど、百万個ぐらいに落ちて、なんとなくこう去年に比べて薄暗い、それでみんな淋しくなったよねとか。だから次第にだと思っただよね。日本はもう既にそこからすると、落ち始めている。だからJRだけが、とにかく一時間で大阪まで行こうみたいなことなんてまだやっているのは、なんだよね。

相京： こういう講演会なんかやって、非常に意識的にやってきているのは、身体に伝えるものっていうか、その人の雰囲気というか、もちろん関野さんもその中のひとりなんですけれども、その人の雰囲気みたいなものを伝えたいっていうのがあるんですね。邦楽の尺八なんていう身体を通して音を出すようなものを意識的にやっているのと、生徒はそういうあまり見たことも聞いたことも、あるいはあったこともない人に会った時に、どういう反応をするのかと思うわけです。そうするとキチッと反応してくれるんですよ。つまり予備校生だ

からかも知れないし、いやそうじゃなくって何か18, 19ということかもしれないし、そういう感覚を彼等は間違いなく持っているし、多分牧野さんも、ずっとこういう予備校やそういう人たちと確認をし合っているのは、おそらくそういう部分なのかと思いますね。牧野さんの仙台の話の中でも、やっぱり18~19の時、関野さんもおそらく、一番影響を受けているのはおそらくそのあたり。我々が、だから予備校生に関わって、その文化みたいなものを伝えたいと。そういうところで反応は間違いなくあると思いますよね。

牧野： それはそのいろんな年代の人に講演をやられて、色んなタイプの人、色んな職業の人や学生やいろんな人にやられてたと思うんですけど、5ヶ所回って予備校っていうのはどうでした、やっぱり聴衆としたら・・・。

関野： 一番小学生5年生くらいまではすごく活発な質問ね。

牧野： 急激に落ちませんか？

関野： 急激に落ちて、中学高校がちょっと黙っている。それに対して予備校生はあんなに活発にね、全部聞ききれないわけですよ。それで大学生になるとまた質問がなくなる。

牧野： 何でなのかなあ。

関野： まあそれはひとつには、本当に聴きたくてきているというのか、やっぱり受験生で勉強しなければならぬのに来ているわけだから、それなりのこう、彼等にとって時間っていうのは大切なものなんで、時間をこう、二時間三時間使うわけだから、それなりの意識を持って、本当に聴きたいと思わなければ来ないから。

牧野： 動員されているわけではないからね。

関野： そうですね（笑い）。

牧野： それともう一個はきっとね。二時間の講演聴きに行ったら、あと残り二時間くらいは頭が熱くなって勉強できなくなっちゃうと思うんだよね、その日やっぱり考えちゃう。でそのアンケートの欄なんか見ても、俺も行きたいなみたいなこと書いてある、大学行ったら行くぞみたいな。そうしたらね、こいつは家に帰ったらしばらく昂奮してね、勉強が手につかない。だけどその一日を捨てても来るとい、よほどの決意をしないとねえ。だからそのへんでは、自分達がやっているからというわけでもないんですけど、割と多くの人が出て質問も鋭いし面白いしねえ。

関野： 5年生くらいまでは本当にとまんないですよ、質問が。

牧野： 急激に消えるんだよね、それが。日本の未来のことを考えると、6年生ぐらいから
中学高校のへんがズボってエネルギーを失って、しかも学校が動員していい話だから聴け、
なんていうとなおさらもう聴けなくなっちゃう。だから大学生だよ、やっぱし。

関野： あとは、嫌われたくないとか、褒められたいとか。小学校6年生にどんな時一番ハ
ッピーだと思うっていったら、けっきょくほしいものが手に入ったらって子もいたんだけ
れど、一番多いのは褒められた時。だから逆に言うと嫌われるのはいやだし、特に親とか両
親に褒められるっていうのもあるけど、仲間から褒められる、良く思われたい、嫌われたく
ないっていうのがあるから、逆に自由に発言できなくなっちゃう。こんなこと言ったら皆か
らどう思われるだろうかとかね。

牧野： それは、今度は南米なんかで考えたら、褒められることはやっぱし大好きでしょう、
みんな。

関野： みんな大好きですよ。

牧野： おまえすごい狩人だなんて言われたら。だけど、けなさないでしょう。足の引っ張
り合いなんか、おまえへタクソだからダメだって。

関野： それはいいですよ。だから逆に日本だったら言われるような人でもそれはそれな
りにやった。

牧野： 役割をやった。それって世界中そうじゃないですか。要するに日本みたいに足を引
っ張ってお前はバカだ、ダメだっていう・・・。

関野： それはやっぱり時間の流れと関係していると思いますよ。

牧野： 多分そうでしょうね。

関野： だから、僕、病院に行った時に、やっぱりお年寄りだと、外来混んでいるわけ
でしょう。それでお年寄りが着替えるのにもやっぱりうまくいかない、みんな看護婦やなんか見
ているからあせっているわけですよ。看護婦は早く次を入れたいから、おじいちゃん早くし
てよって言うんだけど、急ぐなよって。ようするに、いいんですよ、その人のペースで

やればね。ところがそうはいかない風になっちゃってる。もう効率化社会で。でも向こうに
行ったらもう自分のペースでこうやってても多分文句いわない、社会全体が。

牧野： 子供なんか遊びでもすごく遅い子もいるけど、あれがだんだん学校に入って、先生
も言う、親も言う、早くやらなきゃ駄目って、あれがね、きっと社会全体を覆っているんだ
よね。

関野： スピードだけでなく、他の事でも、スピードに関連して、なんか、みんな動物を追
うのがうまくないとか、弓矢ちゃんと撃ってもちょっとずれちゃうとかいう人がいても、要
するに全体で取ればればいいわけだから。

牧野： ああ。みんなで分けて食ってるっていうのもあるよね。もし個人でみんなそれを獲
ったものがみんな自分の物だっていうのだったら、のろまのやつとか獲れないやつはみん
なからバカにされて、あいつだから貧乏なんだ、みたいになっちゃうんだよね、きっと。

関野： だから弓矢はへただけど、こいつは、薪はちゃんと取って来るからいい。

牧野： それでいいやってね。もう、終わりましたね。

相京： そうですね。あの、もう一点だけしつこく聞きたかったのは、予備校生に、要する
に教養みたいなものを伝えるのは、年齢みたいなものはあるというふうに思いますか。それ
とも状況によるとか。

関野： いや6年生に四日間、教室で二日野外で二日いろんなことを伝えたんだけど、反
応が悪いんでちょっとむくれてたんだけど、でも最後に彼等自分たちで文集を作って、全
部絵を描いて見せてくれたんだけど、ちゃんと反応してるんですよ。だから言えないとい
うかそういうのはあるけれども、そういう意味では中学高校も自分なりにこう、言うのはや
ぱり恥ずかしい時期、いろんな時期があると思うんですよ。でも反応しているんだなって思
います。

相京： 予備校生あるいは大学生も、みんな持っているのが、たまたまその時に言っていい
んだとか、あるいは聴く人がいるという、いってみれば聞く大人が、聴く側がどれだけ意
識しているかとうあたりでしょうかね。

関野： あとその、会場に集まる人の設定で、だから河合塾みたいに来たい人だけ来ればい
いんだよっていうのが、僕は、そうすればいいんだけど、例えば成人式でとか、みんな

来なさいとか、中学校、高校で授業の一環としてやると、聴きたくもないのになんでこんなおっさんの話を聴かなきゃならないんだよというのが、いや、そういう連中までも聞かせる術を身につければいいんだけど（笑い）なかなか。

牧野： そうしたら医者やめて予備校の教師（笑い）。

（三人：笑い）

相京： どうも長い間ありがとうございました。いや今日の話だけでもたいへん深くて。

（文責 相京範昭）